

スマホが変える日本の防災活動

苦い体験から生まれたアプリ

「全消防団員に瞬時に火災を知らせるアプリケーシヨンをつくりたい」。消防団員時代に通報が届かなかった苦い体験から代表・和田晃司(35)は3年半を掛け、消防団緊急時アシストアプリケーシヨン「S.A.F.E.(セーフ)」を開発した。システム開発を得意とする仲間、大学の生徒や教諭らの支援で完成でき、みんなの想いが詰まったアプリケーシヨンだ。2018年夏に福島県内で初めて須賀川市で導入されて以降、消防団員が消防車より速く現場に到着し家人の安全を確保できたケースもあり、全消防団員が情報共有できるシステムの効果が現れている。「このシステムに絶対の自信を持っている」と力を込める和田は、福島県内の全市町村での導入をめざしている。

旧来の連絡システムが抱える問題点

須賀川市ではこれまで、全消防団員に火災を知らせるにはタイムロスが生じ、労力が掛かっていた。119番通報

が入る消防本部から全団員に報が伝わるまでには、各部長か班長が仲介してメールや電話で伝達するため、慌ただしく全員に行き届かない時も。和田は消防団員5年目だった2012(平成二十四)年、出動すべき緊急時に覚悟できなかった悔しい経験を味わった。大学時代にプログラミングを学んでいた和田は、このことから「全団員が瞬時に火災現場を共有できるアプリケーシヨンをつくりたい」と思うように。周囲にアイデアを語るうち、各自自治体の消火栓の位置をホームページで公開していたシステムエンジニアの斎藤浩平と出会って意気投合。2015(同二十七年)年4月、一緒に「情報整備局」を立ち上げた。

地域課題を解決するアプリ発表会で、最優秀賞を受賞

アプリケーシヨン制作を業者に依頼すると見積もりは800万円と高額。そこで和田は、福島県郡山市のWIZ国際情報工科自動車大学校に制作協力を依頼。生徒のスキルアップにつながる同校は快諾。同校の生徒有志は2015年度にグループワークを重ね、

IT技術で地域課題を解決するアプリケーシヨンの発表会「コネクト2015」でUDC(主催郡山地域ニューメディアコミュニティ事業推進協議会)で最優秀賞(郡山市長賞)を受賞。2016年度は同校の授業の一環で「情報整備局」と共同でアプリケーシヨン開発を進めた。2017年度は「情報整備局」がさらなる改良を重ね、アンドロイド版とiOS版を完成。和田と斎藤は毎週末打ち合わせをし、平日は深夜まで作業した。アプリ開発と並行して須賀川市に導入の交渉も。2018年春に市と契約を結び、同年7月、ついに運用が始まった。

運用をはじめると見えてくる改善点と成果

当初は地図表示のズレや誤報などもあったが、その度に改良し精度を高めていった。すると迅速な初期消火につながる成果が出てきた。地図に火災現場と消火栓の位置が表示される機能により、団員が自発的に応援に動いたケースがあった。アプリで通報を受け、火災現場と最寄りの消火栓があまりに離れていたのを確認した管轄外の団員が、

ホースをつなぐ中継が必要だと自己判断し、消防車ですぐ駆け付けて消火体制を整えた。別のケースでは、偶然火災現場近くに住んでいた団員は電光石火の早業で現場に到着できた。それにより消防車が駆け付ける前に、身の危険をかえりみず消火活動していた家人を、いち早く安全に避難させることができた。

これからの展望 日本各地の安全のために

和田は「諦めずここまでこれたのは精神的に辛い時期に支えてくれた妻、様々なアドバイスをくださった方々、一緒に苦勞してきた仲間がいたから」と周囲の支えに感謝する。今後はアプリケーシヨンを多くの自治体に広めるのが目標だ。今年2019年4月には須賀川市と契約を継続。古殿町とも契約を結び、また二歩前進した。和田は「このアプリを全国の消防団通報のスタンダードにしたい」と目標を掲げ「まずは2023年までに福島県内の全市町村に導入させる」と決意する。「団員のころから必要なアプリケーシヨンだと思っていた。システムに絶対の自信を持っている」と和田。日本の消防団員がこのアプリを使い、各地の安全が守られる未来を思い描いている。